



Title	Prediction of the prognosis of somatoform disorders using the Minnesota Multiphasic Personality Inventory (MMPI)(内容・審査結果要旨)
Author(s)	佐藤, 亜希子
Citation	
Issue Date	2020-09-30
URL	http://ir.fmu.ac.jp/dspace/handle/123456789/1338
Rights	
DOI	
Text Version	none

This document is downloaded at: 2021-01-15T17:48:48Z

論文内容要旨

しめい 氏名	さとう あきこ 佐藤 亜希子
学位論文題名	Prediction of the prognosis of somatoform disorders using the Minnesota Multiphasic Personality Inventory (MMPI) (ミネソタ多面人格目録 (MMPI) に基づく身体表現性障害の予後予測)
<p>【背景】慢性疼痛のうち心因性疼痛は、身体表現性障害に含まれる。慢性疼痛を含む身体表現性障害は、有効な治療法は確立しておらず、しばしば難治性で治療が長期化することが多い現状である。一方、ミネソタ多面人格目録 (MMPI) は現在最も多く用いられるパーソナリティ検査の一つであり、身体表現性障害患者の MMPI による性格傾向について多くの調査・研究が報告されている。しかし、予後予測因子としての研究はほとんどない。当院では 1996 年 6 月から、心身医療科と整形外科とのリエゾンカンファランスを実施し、慢性疼痛患者への精神医学的アプローチを実践し、当該症例についての MMPI データを蓄積してきた。本研究では、同期間内に心身医療科で身体表現性障害と診断され MMPI を実施された症例と併せ、全症例についてその予後に着目し調査を行った。</p> <p>【方法】2013 年 1 月 1 日～2017 年 12 月 31 日までの、福島県立医科大学付属病院心身医療科で身体表現性障害と診断された症例 125 例のうち、整形外科併診症例 (リエゾン症例) は 67 例、心身医療科のみの単独受診例は 58 例を対象とした。2019 年 5 月 1 日～同年 7 月 31 日にかけての診療録の情報から、各症例について、身体表現性障害の予後に影響を与えうると考えられる因子についての情報 (臨床情報及び MMPI の各項目) と予後情報 (治療による改善の程度により、改善、非改善に分類) を収集し、統計解析を行った。尚、本研究は福島県立医科大学倫理委員会の承認を受けている (承認番号: 2941)。</p> <p>【結果】全対象における予後改善群と非改善群の比較では、発達障害については非改善群は改善群と比較して高い確率で存在した。MMPI の各尺度では、非改善群は改善群と比較して Hy のみ有意に高い値を認めた。予後改善群と非改善群の Hy 得点について ROC 分析を行った結果、カットオフ値(73.5 点)が算出された。</p> <p>【結論】身体表現性障害と診断された患者の MMPI の Hy 尺度において、カットオフ値以上の得点を認めた場合、従来の支持的精神療法や薬物療法での改善は困難であると予測され、心理社会的治療、薬物療法、環境調整等を組み合わせたより強化した治療計画を立てることが必要と考えられ、今回のカットオフ値は治療選択の上で重要な指標になることが示唆された。(962 字)</p>	

※日本語で記載すること。1200字以内にまとめること。

学位論文審査結果報告書

令和2年7月2日

大学院医学研究科長 様

下記のとおり学位論文の審査を終了したので報告いたします。

【審査結果要旨】

氏 名 佐藤亜希子

学位論文題名 Prediction of the prognosis of somatoform disorders using the Minnesota Multiphasic Personality Inventory (MMPI)

申請者は身体表現性障害の転帰・予後について、整形外科・精神科（心身医療科）のリエゾンおよび治療を受け、かつ精神科治療において古くから用いられるミネソタ多面人格テスト（MMPI）を受けた患者 125 名に対し後方視的にカルテ調査を行い、転帰不良（非改善）群と良好（改善）群の 2 群を分類し、それらの転帰・予後に影響する心理学的あるいは生物学的諸因子について検討した。また MMPI の下位尺度のなかで予後不良に関連する因子を検討した。ROC 分析の結果、MMPI のなかではヒステリー（Hy）尺度が、予後予測に関して高い特異度とやや高い鋭敏度を示すことを明らかにした。

身体表現性疾患、とりわけ整形外科等で問題となる慢性あるいは難治性の疼痛性障害の予後不良群を、比較的少ない自記式調査項目で予測できるなど臨床面での有用性は高いものと考えられる。MMPI のような古くから用いられている自記式尺度でありながら、その項目数の多さ（500 項目以上）から临床上の使用が制限されてきたことを勘案すると、身体科においても比較的簡便に利用できるような方法を明らかにした点が本研究の大きなストレングスと考えられる。

以上より、本論文は学位論文として相応しいものであると報告する。

論文審査委員 主査 前田正治
副査 安村誠司
副査 市川優寛

学外審査委員 （山形大学医学部精神医学講座） 大谷浩一